

わたしは「生命をいただいている」とことを教えていた。学校でヤギを繁殖させることができが、消費者は家畜のことを知らないなすぎる。(ヤギの提供を通じて)これが最大の目的で、子どもたちの目の前で交尾させて、きちんと繁殖について伝える。それによって『生きること』の中身を感じ取れるんです。できれば今後は、ヤギのと畜から解体、調理までも教えていきたい」(サミットでの今井さんの講演)

「全国山羊サミット」のひとつのイベントが開かれた競り(9月1日、清水市内)。サミットには参加者が200人以上、事例発表などが行われた。山羊サミットは、山羊の生産者や飼育者による情報交換の場として、毎年開催されている。今年は、山羊の飼育方法や、山羊の健康維持などのテーマで、多くの講演が行われた。また、山羊の飼育に関する技術的な問題についても、多くの意見が交換された。



現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第4回

ヤギ飼育の可能性と
その取り組みを追う

かつて農村地帯ならどこでも飼われていたヤギの姿を見かけなくなつて久しい。そんななかで近年、ヤギの飼育を試みたり、乳製品づくりなどに乗りだす人たちが現れている。十勝管内清水町で開かれた「全国山羊サミット」の様子を交えながら、さまざまな実践に取りくむ人たちを紹介し、21世紀の人間とヤギとの関わりを考える。

**小学生のヤギ飼育
体験が共感を呼ぶ**

さんが代表世話人をつとめる「山羊ネット」は、地元農家や獣医師らと連携して小学校に子ヤギを提供する。子どもたちはヤギを迎える「入学式」からエサやり、「結婚式(ヤギの交尾)」の見学、ヨーグルトづくりなどの体験学習を続いている。十五年ほど前から始まつたこの試み、いまでは十五校(うち新潟県内は十三校)でヤギを飼育するまでになった、という。

静かな山羊ブーム
で頭数増の兆しも

本道酪農の 全国に広がる

らは、子どもたる
になるようだ。
りするヤギもい
もたちと一緒に
あげる。不明な
取りする。
今井さんの存在
が、
ヤギを中心にして、今年春に生まれた当番
が、値段はせいぜい一万円台と安いので、農場に持ち帰る飼い主も多い。
熱心にヤギを買い求める人がいた。

静かな山羊ブーム
で頭数増の兆しも
わたしの少年時代（60年代）には、農村地帯ではヤギの姿をよく見かけたが、農業の規模拡大が進むにつれて生じて代わり、いまではヤギを目にする機会はめったにない。ちなみに道内では、一九五七年には



ランラン・ファームで5年間、ヤギを飼ってきた鶴我佐知さん。工房ではヤギ乳チーズの製造も始まった

工房ではトイザニアへの表道も知るよ。

イスのヤギの処理が沖縄に集中していることが、肉の値段のさの一因になっています。ヤギを使つた料理をレストランで提供したりして、一日も早く及させたい」(鶴我さん)と言つて表情を引き締めた。ギの乳製品づくりの先頭を走る同ファームの今後の展開が楽しみだ。

組合の発足当時は、十勝農協連が首領を取つてヤギの普及を図ろうとしたが、生体価格が安いえに寄生虫の発生などで思うにまかせず、十年前から清水町単独の組織になつた。現在の組員数は十三戸。酪農をリタイアした年配者が多い。

「組合ができて一二三年後、細々と残つていたんだが、長野で会議があつたときに九州の業者と知り合い、「生体でキロ七百円なら買取るよ」と言わされて、それなら採算ベースに乗るな、と思いつを入れた。しばらくは沖縄向うで順調に売れてきた」(竹中さん)

が、最近は価格が低迷し、口蹄疫や狂牛病の影響も受けていることから、

二棟あるヤギ舎は手作りで、鋸
はうは軌道に乗った。午前八時頃に
し、搾乳を済ませてエサを与え、
ツクで運動させる。今後は、九月
店した併設のレストランとの間の間
ースで放牧する計画もある。

オスの子ヤギは肉用として沖縄
荷し、メスの親ヤギから搾った乳
内の乳業農芸公社に委託してソフトト
ムやヨーグルトに加工してきた。

業メーカー技術者)が中心になつて、チーズづくりも始める。頭数を倍増させて、来年は六十頭ほどのヤギから搾った乳をチーズに加工し、製品はレストランや直売所、ホテル関係などで販売していく計画である。

「乳量が少なく手間がかかりますが、庶民的なイメージのあるヤギだからこそ、おいしいチーズをつくり、みんなに食べてもらいたい。彼女たちの可能

ちがグレープでヤギ飼育に取りくむのが良い方法かもしれません」道酪農畜産課中小家畜係長の天野徹さんがこう話すように、本州府県や沖縄などに比べるとヤギの存在感は薄いが、全国的にはここ数年、静かなヤ

「沖縄では蒸膳料理の素材にヤギ肉を用いる食習慣がありますが、道内で生産組合があるのは清水町だけ。観光の一部門や、社会福祉法人などで飼うケチがグループでヤギ飼育に取りくむのースもあるようです。定年帰農の人たちが良い方法かもしません」

一万九千戸あまりの農家で合計一萬二千頭ほどのヤギが飼われていたが、七年になると三百四十戸、四百六十頭へと激減。その後は、やや頭数が増えたものの、九〇年代には五百八百頭の間で推移してきた(農水省畜産統計の数値)。全国的にも同じ傾向が見られる。道農政部がまとめた二〇〇〇年二月現在の飼養状況が最新の数字で、それによると、道内一千六市町村の五十一戸で合計七百十七頭――とある(ただし、行政が把握しきれない頭数もかなり存在する)。イスラエル産のザーネン種を改良した乳用種の「日本ザーネン」が七割を占め、ほかに「トカラヤギ」や「種用ヤギ」が飼われている。



「生体価格の補てん策を」と訴える生産組合長の竹中懸さん

自然にやさしく、中山間地に適した動物であり、生産者・研究者・メーカーが連携して産業としての見込みをつくりたい（藤田さん）

前出の学校での体験学習のほかに、乳や肉の利用、道路脇や遊休農地などの下草刈り、アニマルセラピー、さらには身近なペットなどと、ヤギの可能性は幅が広い。粗食にも耐えるし、繁殖しやすく、子どもや高齢者でも扱える。牛のような糞尿問題を起こさず、環境に対する負荷も少ない——二一世

チーズ製造も着手

九月下旬のある日、わたしは道内で
もつともヤギの飼育頭数が多い清水町
を再訪していた。

が、スタッフ全員が農業の未経験者で、エサのやり方もよく分からない。ヤギを飼っている農家に通いつめて、多くのことを教えてもらった。

「突然、ヤギが病気で死んでしまったり、そのあたりの雑草を与えていたら妊娠中はガリガリに痩せてしまったりしました。十頭ほどのヤギが野犬に襲われたこともあります」（鶴我さん）

地道な取り組みによるところが大きい。では断つだ。これは、八七年に設立された清水町特用家畜生産利用組合の竹中懸さん（一九三三年生まれは合計百七十頭ほどのヤギを飼っている。開拓二代目で、自分の子どもをヤギの乳で育てた経験もある。牛飼いもやつたが、いまでは「二一世紀の畜産はヤギしかない」と確信している。

組合の発足当時は、十勝農協連が頭を取つてヤギの普及を図ろうとしたが、生体価格が安いえに寄生虫の発生などで思うにまかせず、十年前から生は清水町単独の組織になった。現在の組合員数は十三戸。酪農をリタイアした年配者が多い。

円)が保証されれば、なんとか經營が成り立つ。我々もぜいたくは言わない実勢価格との差額を支援してもらいたい」と、組合長の立場で力説する。そんなきびしさはあるが、竹中さんは「ヤギは『これから動物』と希望をもつてゐる。「地下水や河川の汚染など」の糞尿公害もあって、今後は牛の減少が避けられない。農業とはいへ経済優先ではいかん。後繼者がいないなどで荒れていく農地を活かす方法として、公害のないヤギや羊に切り換えたらいし提言。台湾やヨーロッパ諸国などで飼育頭数が増えている状況を聞くにつけ、竹中さんは「二一世紀はヤギしかない」と自信を深める。

つていたんだが、長野で会議があつたときに九州の業者と知り合い、「生体でキロ七百円なら買ひ取るよ」と言わされて、それなら採算ベースに乗るなと思い力を入れた。しばらくは沖縄向けて順調に売れてきた」(竹中さん)

が、最近は価格が低迷し、口蹄疫や狂牛病の影響も受けていることから、

退職後の人生の夢
をヤギ飼育に託す

退職後の人生の夢 をヤギ飼育に託す



「ヤギを通じて自然環境を元に戻したい」と話す仁木町の中園稔さん

九州出身の中園さんは酪農学園大学の一期生。卒業後は雑誌記者をへて、山梨県内の農村研修施設や道内の農業高校などで三十年間ほどの教員生活を送った。最後の赴任校、81～97年になつた余市高では園芸を担当したが、学校の農場だけでは実力がつかないと考え、奥さんが新規就農する形をとつて五ヘクタールほどの土地を取得し、八五年に現在地へ移り住んだ。

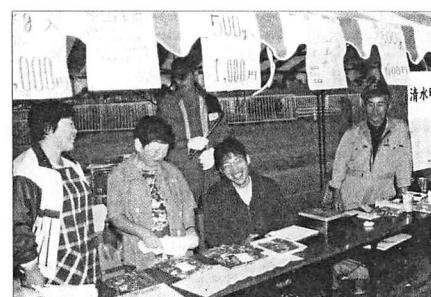
もともと動物好きで農業畠が長い。購入した土地にリンゴやサクランボを植え、牛を一頭飼つて乳を搾り、池を掘つてアイガモを放すなど、現役時代も実践に努めた。ヤギは、十年前に二頭購入したのを皮切りに、最近も後輩

がやつている赤井川村の観光農場から

一頭を導入。さらに山羊サミットでも一頭買ってきた。いまではオスが二頭、メスが三頭——これを二十～三十頭まで増やして自家用のチーズをつくるのが目標、と笑顔を見せる。

「近所の三歳くらいの子がヤギに触つて喜んだり、赤ん坊を連れた父母が見学にきたりしますよ。ここを情操教育の場として地域の子どもたちに開放し、ヤギと親しんでほしい。新潟のネットワークのように、学校へ出張してヤギを飼つてもらい、休みのときには我が家に引き取つてもいいいしね」と夢を広げる。四国では、農協などが「山羊パンク」をつくり、遊休地を抱える農家などにヤギを貸し出している、とか。そんな話を紹介しながら、

「ヤギの飼育は自然環境を元に戻そうとする隠れた運動ですよ。農業をばらまく農業ではダメだし、ヤギや鶏を飼うようにならないと農村は豊かになれません。北海道ではヤギに対する関心が薄らいでいるし、(農業系)の大学にも応援態勢がない。でも、単なる経済動物ではなく、情操教育とかゆ



「サミットの一環でヤギ肉の直売も—肉の普及は今後の大きな課題だ

21世紀の救世主か 広がる飼育の試み

「全国山羊ネットワーク」代表の長野實さん(日本生物資源科学部教授)による

と、世界のヤギの飼育頭数はアジア・

アフリカ地域で増加が著しく、アメリ

カでも八〇年代から年率一%で増えて

おり、同国のヤギ乳生産量は年間六〇

万トンにも上る。ヤギ乳チーズなどの消費がアメリカで盛んになり、ヨーロッパからのヤギ乳製品の輸入も増大。「ヤギは二世紀の救世主」と力説する長野さんは、その理由として、①牛など穀物消費型の家畜飼養ばかり制限されるなかで、ヤギは未利用地資源を有効利用する力が大きい②健全農業の復活に有効性がある③国際協力への理解に役立つ④ヤギを伴侶とする生活は人々に富むんじゃないでしょうか」

と、中園さんが力を込めた。生産拡大や効率一辺倒の畜産を、生命の大切さを感じ取れるものに転換していくには、人生経験に富んだ定年帰農者の役割は大きいようだ。

「畜産の研究」の四つを挙げている(99年2月号)。たかがヤギ、されどヤギ——この小動物の存在は、なかなか奥が深いものがある。

道内では、前出の取り組みのほかにも、飲用牛乳を製造してきた中標津町内の牧場がヤギ乳の製品化を模索したり、新規就農者がヤギを飼う試みなどが始まっている。北の大地のあちこちでヤギの姿が見られる時代は、そう遠くないのかもしれない。

※ヤギに関する情報は、(社)日本綿羊協会のホームページを参照するとよい。